

校名：愛知教育大学附属特別支援学校

所在地：〒444-0072 愛知県岡崎市六供町八貫15 電話番号：0564-21-7300

記載日：平成28年5月20日 記載者：松岡 史憲 記載者役職：主幹教諭

貴校の校風、おおまかな特色について：

本校は、知的障害者を対象として小学校・中学校および高等学校に準ずる教育を行い、併せて適切な支援を施すことを目的とした特別支援学校である。

(1) 一人一人を大切にす指導

- ア 一人一人の発達を踏まえ、将来につながる価値ある成長を見据えた指導内容を個々に設定して、指導にあたる。
- イ 長期目標と短期目標のそれぞれを明確にし、一貫した指導を進め、その評価を確実にする。そして、それを次の指導に生かす。
- ウ 障害、能力、特性を踏まえた活動を用意し、個に即した学習過程、指導の手だてを工夫する。
- エ 具体物を使った活動を中心に、習得できるまで繰り返し指導にあたる。
- オ 常に子どもの姿を見つめて指導にあたり、新たな動きや小さな伸びをきめ細かくとらえ、個別の教育支援計画、指導計画、移行支援計画に生かす。

(2) 子どもを育てる環境づくり

- ア 教育施設の整備とともに、楽しく、喜んで活動したくなるような教具や遊具を準備する。
- イ 遊具、実習地（農園）、日常生活訓練施設（くすのきホーム）等を積極的に活用する。
- ウ 明るく豊かな壁面構成の工夫や、整理整頓に心がけ、子どもが気持ちよく生活できる環境をつくる。
- エ 地域の教育的資源を活用し、学校間交流や居住地交流など地域とのふれあいや交流・共同の場を工夫する。

(3) うるおいのある学校づくり

- ア 生活にリズムと規律を与える日課、週の予定を設定する。
- イ 一人一人を生かす学校行事、各部行事を実施する。
- ウ 全校児童・生徒がふれあう「なかよしタイム」など、全校で活動する場を計画的に設定する。

(4) 学校と家庭、その他関係諸機関との積極的な連携

- ア 常に保護者や地域からの情報収集に努めるとともに、地域社会に進んではたらきかけ、学校と家庭・地域相互の信頼関係をつくる。
- イ 学校、家庭、関係諸機関とのネットワークづくりに努め、子どもの指導に対して共通理解を図り、連携、協働して同一歩調で指導にあたる。
- ウ 学校評議員会の開催をはじめ、父母教師会や卒業生父母の会と連携して、開かれた学校づくりに努める。
- エ 本校の教育的成果や、集積した支援ツール等を活用して、岡崎市周辺の園児を対象にした相談活動を実施したり、学校園や保護者など、地域に向けた研修会等を企画したりして、特別支援教育に関する地域のセンター的な役割を果たすように努める。
- オ 附属岡崎小学校、附属岡崎中学校と連携、協働して共生教育を推進していく。

(5) 学校運営の評価と改善

- ア 「運営連絡会議」を定期的開催し、学校運営や教育にかかわる問題への対応を検討し、速やかに対処する。
- イ 保護者、学校評議員、教職員へのアンケート調査結果などから、学校運営に関する評価を行う。
- ウ 学校運営に関する評価を公表するとともに、その結果を分析し、学校運営の改善を図る。

貴校の卒業生の活躍状況について：

① 追跡調査をしているか、また、その方法

年に一度、卒業生一人一人の職場への訪問を行っている（卒業後3年間）。

② 把握状況と保管先（大学、学校園、その他）

①から得た情報を学校にて保管している。

③ 具体的な状況

一般就労、就労移行支援施設など、さまざまな進路にすすんでいる。

貴校勤務経験者の先生方が公立学校・教育委員会などへ戻られた後の活躍状況について：

① 追跡調査をしているか、また、その方法

毎年一度、愛知県内の附属学校にいる者が出身地区ごとに中心となって、聞き取りなどで動向調査を行っている。

② 把握状況と保管先（大学、学校園、その他）

名簿の形式にまとめ、学校園が保管している。

③ 具体的な状況

さまざまな立場で中心となって活躍している。下記はその一例である。

○教育委員会では各課における中心的な立場として、愛知県内、また、地域の教育をリードしている。

○学校現場においては、研究主任として研究推進の中心になったり、主幹教諭や教頭、更には校長として学校の管理的な立場として活躍したりしている。また、地域の教科指導員として、校内の教育研究に加え、地域内の学校の教育推進にも大きく影響を与えている。

魅力ある、特色のある、または、今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取り組みなどについて：

冒頭に記載したように、本校では、子どもを中心に据え、子どもの自主性、能動性を大切にした教育を展開している。

（1）小学部

小学部では、子どもが「日常生活で、できることを増やしたり、ひろげたりして、それらを生活のなかで生かすことができるようにする」ことをねらいとし、子どもたちの姿をとらえ、将来を見据えて指導にあたっている。

○心と体を育てる

・あいさつ、返事を通して ・動きたくなる場面を設定して ・生活にリズムをもたせて

○身辺自立の基礎を育てる

・できることを見極めて ・体得するまで繰り返して ・多くの生活経験を通して

○集団に参加する力を育てる

・みんなで活動する場をもって ・友達とかかわる場を設定して

・ふようタイム

小学部全員で行うふようタイムの時間を、「わくわくタイム」と呼び、子どもがわくわくするよう

な遊びを中心とした活動を用意し、個々のねらいに迫れるようにしている。また、友達や教師との多様なかかわりを体験できるような活動や、作物を栽培する活動も行う。1・2年生においては、ことばやかずにかかわる指導も進められるよう柔軟に取り組んでいる。

・日常生活の指導

各学級とも、月曜日から金曜日の第4校時に日常生活の指導を位置付けている。食事の指導を中心にして、衣服の着脱、手洗い、排せつなどの身辺自立ができることをめざして実施している。

(2) 中学部

中学部では、社会自立の基礎づくりとして、「友達と協力して活動できる子」、「自分のことは自分でできる子」を育てることをねらいとしている。また、生活の中で生きる基礎的な学力を習得できるようにするとともに、体験を通して、働く意欲や継続して取り組む力が育つように支援している。

○生活の中で生かせる

- ・一人一人の子どもに合った教材・教具を工夫して基礎的な学力をつける
- ・多様な学習集団を編成して

○継続して取り組む力を育てる

- ・生徒会、委員会活動で役割をもたせて
- ・作業学習で一つの仕事を繰り返して

○人やもの・こととのかかわりをひろげる

- ・学校行事や部行事、ふようタイムを通して
- ・中学部全員で活動する場（朝の集会活動等）を設定して

・ふようタイム

子どもの興味・関心に基づいた楽しい活動を通して、人やもの、こととのかかわりをひろげることができるように実施している。

・きらきらタイム（総合的な学習の時間）

『生き物 大好き 自分 大好き』をテーマに、栽培活動や調理活動を通して、生き物や食を大切にすることを育てるとともに、自分自身の健康・命について考えるようにしている。

・グループ別学習

国語、数学、職業・家庭の3教科については、学年の枠をはずした三つのグループを編成し、個々の学習がより深まるようにしている。

・作業学習、校内実習、職場体験学習

作業学習は、1年「食品」、2年「工芸」、3年「クリーニング」を行う。校内実習では、子どもが仕事内容を理解し、長時間仕事を続けられるように指導を行う。3年生は、地域の事業所で数日間の職場体験学習を行っている。

(3) 高等部

高等部では、卒業後、社会的にも職業的にも自立できるように、「社会の中で生きる力を身につけるとともに、生活経験をひろげ、基礎的な知識を得て、働く意欲や体力を高める」ことをねらいとしている。

○社会で生きる力を伸ばす

- ・日常生活に関連する内容を学習対象にして
- ・学校行事や高等部行事、ふようタイム、ドリームタイム（総合的な学習の時間）を通して

○働く意欲を高める

- ・校内実習、職場体験実習、現場実習を通して
- ・作業学習で働いた成果を実感できる場を通して

○社会や人とのかかわりをひろげる

- ・校外学習を実践の場として
- ・他校の生徒と交流できる場を通して

・ふようタイム

買い物学習や外食学習、他の特別支援学校との交歓会など、独自性のある活動や楽しい学習を通して、個々が社会自立をめざし、生きて働く力を培うことをねらいとして実施している。

・ドリームタイム（総合的な学習の時間）

『見つけよう わたしたちの楽しい時間』をテーマに、個々の余暇活動の充実を図ることをねらいとして実施している。

・作業学習、校内実習、職場体験実習・現場実習

農園芸・窯業・縫製・木工・織物の各班にわかれて作業学習を行う。

校内実習では、就労先での勤務により近い形で、作業の形態や時間帯を設定し、指導を行う。1・2年生は、夏休みに1週間程度、後期に1週間の職場体験実習を行い、3年生は各事業所等で、前期と後期、各2週間の現場実習を行う。

地域における本校の存在意義について：

○地域の教育活動の中心となっている学校

- ・本校がある愛知県内の三河地域は、地域で教育研究会を組織している（：三河教育研究会）。その研究会で取りまとめに加え、授業研究への取り組みに指導や助言を与え、推進している。

附属学校の存在意義、貴校の存在意義について：

本校は、「子どもありき」の理念のもと、子どもの豊かな生活を願い、教育活動を進めている。そのために、授業をはじめ、研究の方向性やコンサルテーション事業など、大学の専門機関と連携している。

このような取り組みができるのは附属学校だからこそだと考える。附属学校の取り組みを更に充実させ、公立との連携を図ることが大切だと考える。